

双極性Ⅱ型障害当事者の生きづらさに関する一考察

——「生きられた経験としての病」の語り——

関西大学大学院社会学研究科 松元 圭

1 目的

双極性障害は躁とうつを周期的に繰り返す気分感情障害の一種で、仕事や人間関係、社会的機能など様々な領域に影響を与える慢性疾患である、とされる。

双極性障害には大きく分けてⅠ型とⅡ型があり、激しい躁状態を示すものをⅠ型、なんとか社会生活を送ることができる軽躁状態を伴うものをⅡ型としている。

今日、脳科学や神経生物学の進歩に伴い原因究明が進んでいるが、全容解明には至っておらず、リチウムや抗精神病薬、抗うつ薬を用いた対症療法が主流である。また精神医学領域では、診断の妥当性や薬への反応を量的調査によって明らかにする研究が行われている。

しかし、このような客観性、普遍性を追求した量的調査と症状の数値化の下に、当事者の「生の声」は個別、特殊なものとして捨象される傾向にある。

本報告ではこのような現状を批判的に捉え、双極性Ⅱ型障害と共に生きる当事者がどのような困難や生きづらさを抱えているのかを、数値化、一般化し得ない「生きられた経験としての病」として描き出すことを目的とする。

2 方法

上記の目的のため、双極性Ⅱ型障害を抱える30代の女性Aさんにセルフレポートとアクティブインタビューを実施した。このようにして得られたデータから、カテゴリーを抽出し、さらにそれらをグループに分けて、語られた／語られなかった内容を現存在分析的に考察した。

3 結果

分析の結果、①当事者は軽躁や鬱といった気分の浮き沈み（主症状）だけでなく、日常生活に関わる様々な副次的症状を抱えている。②それらの症状が直接的／間接的に影響し合って、人間関係の破綻や転職、社会生活の困難をもたらし、当事者の生きづらさの根源になっている。③幼少期より他者からの期待に応えること、役割を遂行することに固執し、他者からの評価によってしか自己の存在価値を確認できない。④このような困難や生きづらさを理解されないことが悪循環となり、社会への復帰を妨げているということも示唆された。⑤今日の研究では重視されていないが、少なからず家族関係や生育環境にも原因がある。ということが明らかになった。

4 結論

調査対象者が1名であるため一般化することはできないが、以上の分析から双極性Ⅱ型障害の当事者は、社会からの無理解に苦しみながら、気分の浮き沈みだけでなく様々な身体的／精神的副次的症状を抱えていることがわかった。また単に症状だけでなく、社会や他者からの評価によってしか自己を確立できないというアイデンティティの問題を抱えているということが語られ、そのような不承認や誤承認と自己の不確実性が生きづらさの根源であることが明らかになった。

このような質的研究は普遍性に乏しいため今日の精神医学領域での研究では重要視されていないが、社会の中で生きる当事者の「生きられた経験としての病」を記述し、客観性とは異なる一つの真実性を明らかにできたのではないだろうか。